実践研究

特別支援学校の修学旅行に必要な配慮や支援（３）
― 特別支援学校ならではの困難さとその対応 ―

松本和久　安田和夫　櫻井康博　山内達仁
岐阜聖徳学園大学教育学部　埼玉大学教育学部　合同会社太陽ホスピタリティー

Essential considerations on the support necessary for special education school excursions: (3)
Difficulties and their resolutions unique to special educational schools

Kazuhisa MATSUMOTO, Kazuo YASUDA, Yasuhiro SAKURAI, Tatsuhito YAMAUCHI

キーワード：特別支援学校　修学旅行　困難さ

Ⅰ．はじめに

2017年２月、岐阜県の特別支援学校21校で修学旅行を担当する教師に対し質問紙調査を実施した。その結果（松本ら、2018）[1]をもとに、前報で特別支援学校の修学旅行ならではの困難さとその対応例を、１.移動、２.宿泊、３.食事、４.買い物、５.見学・体験の場面別に整理し『特別支援学校の修学旅行を計画する際のポイント（試案）』を作成した（松本ら、2019）[2]。本研究では、この試案の内容を検証するために特別支援学校教師への聞き取り調査を実施した。

Ⅱ．方法

岐阜県の特別支援学校のうち、障害別に抽出した７校で了解の得られた小学部・中学部・高等部の修学旅行担当者３名、合計21名を対象とした。調査期間は2019年２月から３月で、筆者（松本）が各特別支援学校を訪問して一人20分程度、『特別支援学校の修学旅行を計画する際のポイント（試案)』について、2018年度の修学旅行での経験を踏まえた意見を求めた。会話の内容は、了解を得てボイスレコーダー及びUDトーク（コミュニケーション支援アプリ）で記録した。

Ⅲ．結果

特別支援学校の修学旅行ならではの困難さとその対応例について、１.移動、２.宿泊、３.食事、４.買い物、５.見学・体験の場面別に述べる。また、６.その他として１～５に当てはまらないものを挙げる。

１．移動

（１）徒歩・車いす

・新幹線からバスに乗り換える際、駅構内での移動に時間がかかる。また、駅によっては車いすのルートと歩行するルートとが分かれる。
　→　動線について細かく打合せをし、できるだけ移動距離が少なくなるように行程を組んだ。
・普段は車いすを使っていないけれど、長時間の徒歩が苦手な生徒がいた。
　→　自分の車いすを持っていない生徒で、テーマパークでの借用は有料だったので、学校にある車いすを持参した。
・駅構内のエレベーターやスロープの表示は増えているが、車いすからの視点では見えにくい所があった。

→　教師から生徒に伝えることができたが、車いすの高さからも見えるように表示位置を工夫してほしい。

・スロープの勾配が急だったり、急激に折り返したりしている所があった。

→　連続して車いすがこげる人ならよいが、それが難しい生徒は自力で上ることができず教師が介助した。

（２）バス・タクシー

・公共交通機関を体験できるように、京都市内で路線バスを利用したが混雑して大変だった。

→　一部だけ公共交通機関を利用して、他は福祉タクシーを利用してもよかった。

・東京駅でバスを降ろしてもらってから改札口までの距離が長く、駅員さんと合流するまでに時間がかかった。

→　福祉タクシーやバスを降りてから新幹線までの動線を確認しておく。新大阪駅では他の車両とは別の介護タクシーの乗り入れ場所があり、便利だった。

・リフト付きバスの台数が少なく、予約が難しい。また、車いすを固定する所が少ない。

→　リフト付きバスに並行して、リフト付きのタクシーを予約したり現地で介護タクシーを予約したりする。しかし、タクシーの台数が少なく予約が困難なうえ、利用する人数が少ない分保護者の金銭的な負担が大きくなってしまう。

・バスのシートは３点シートベルトではなく２点シートベルトのため、チャイルドシート等が安全に設置できない。

→　車いすのまま乗りたいけれど人数の関係で座席に移らないといけない場合、安全に乗車するために抑制帯などの準備が必要となる。

・バスへの長時間の乗車が難しい。

→　高速道路を利用する際、混雑の少ないパーキングエリアを休憩場所に設定する。多目的トイレの有無をあらかじめ確認しておく。

（３）鉄道

・音声情報を得られない。［聴覚障害］

→　東京の電車には車内モニターがあり、そこから情報（駅名、所要時間、開くドアなど）を得られることを伝える。

・電車のダイヤが乱れた時に状況が分からなかった。［聴覚障害］

→　案内放送だけではなく、視覚的な情報があるとよい。

→　このように、突然の変更や遅れ、事故が起こっても分からないので、メモ帳等を準備して、自分で尋ねることができるように、援助要求スキルを指導しておく。

・東海道新幹線には11号車に車いすを固定できる座席と多目的室があるが、座席数に限りがあり、必ずしも希望通りに予約できないことがある。

→　車いすの生徒が多く一つの新幹線に全員が乗れなかったので、２本に分けた。１本は岐阜羽島から、もう１本は名古屋からと出発地を変えてほぼ同時刻に現地に到着できる新幹線を利用し、その後の行程に影響が出ないようにした。

・車いす席ではなく一般の座席を利用する車いすの生徒もいる。新幹線の通路は車いすが通れるほどの幅がなく、教師が生徒を抱えて移動した。

→　できるだけ入口に近い座席を予約したい。車いすを置くスペースを確保する必要もある。

・長時間の乗車の際には、ロングシート（窓を背にして座るベンチ様の座席）よりクロスシート（進行方向に対して前後方向を向いて座る座席）の方が望ましい。人の出入りもなく、ゆったり乗車できる。

→　あらかじめ鉄道会社に連絡し、確かめる。

（４）航空機

・飛行機のタラップを上ることが難しい。［視覚障害］

→　前後の間隔を空けて、ゆっくり上ることができるようにした。

・空港でのセキュリティチェックが人工内耳のプログラムに干渉し、ゲートを使用できない可能性があ

る。［聴覚障害］

→　利用予定の空港に事前に連絡しておく必要がある。その際、ゲート通過予定時刻まで伝えておくのが理想的だが、少人数ならば空港に入ってからでも対応できる。

・人工内耳は気圧の影響を受けやすい。体調によってはそれまで元気であっても離陸後に強い頭痛を感じることがある。［聴覚障害］

→　疲労が関係するようなので、片道のみ飛行機を利用する場合は往路が望ましいと思われる。計画段階から当該生徒のみ陸路への変更を想定した準備も必要である。

・航空機は鉄道に比べて時刻の変更が頻繁に行われる。情報がどんどん更新されていったり、事前に入っている情報と違ったりすることがある。［聴覚障害］

→　情報が更新されることを想定し、情報が変わった時にきちんと確認してその都度メモをすることなどをあらかじめ指導しておく。ただ、音声のみのアナウンスでは気付きにくいので、音声以外で注意を喚起してもらえるとよい。

・空港で借用できる簡易の車いすへの乗り換えが必要だったり、車いすの生徒は進入路が別ルートとなったりする。また電動車いすの場合、国際規則及び国内規則でのルールもある。

→　こうした対応が必要であることを教師自身が理解し、計画段階で関係機関との相談や確認が不可欠である。今年は自力歩行ができる生徒だったので、機内では教師が支えて歩いた。数年前は、大柄な車いすの生徒が機内での移動に時間がかかり、離陸が遅れてしまったことがあった。

→　修学旅行の場合は機内後部の座席になることが多いが、歩行に困難のある生徒には予約の段階で前方の座席をお願いする。

２．宿泊

・寝転べる部屋が望ましい。

→　和室や和洋室、部屋に風呂のあるホテルを予約する。

・５～６台の車いすに対応できるホテルが少ない。

→　障害者用宿泊施設は、旅行ピーク時に予約ができないことがあり、学校からホテルに個別に直接交渉する、ハイシーズンを外した日程を組むなどしている。

・移動が難しい。

→　見学先や最寄駅からの移動距離が短く、乗り換えの必要がない宿泊先にする。

→　フロントやエレベーターから近い部屋や、廊下に段差のない所を利用する。［視覚障害］

・車いすの台数が多い旅行では、部屋や風呂までの移動に時間がかかる。

→　エレベーターの場所、広さ、一度に乗れる台数、車いすを置いておくスペースを確認しておく。

・部屋の入口が狭いと移動時に危ない。

→　事前に入口の幅や開閉時の状態を確認し、ストッパー等で対応できるように依頼や準備をする。

・緊急時に情報が入らない。非常ベルだけでは分からない。［聴覚障害］

→　フロントやエレベーターから近い部屋で、低層階が望ましい。

→　部屋の鍵を職員が預かったり、マスターキーを使わせてもらったりする。

→　音声情報だけでなく、文字情報があるとよい。

・補聴器の不調への対応が必要である。［聴覚障害］

→　宿泊施設周辺で、補聴器のケアや電池の購入ができる店舗や施設を確認しておく。（補聴器用電池が、一般のお店には売ってないが、薬局に売っていたことがあった。）

・補聴器を外すと聴き取りにくいことや、補聴器をしていても話しかけられる角度によっては聴き取りにくいことがある。［聴覚障害］

→　聴覚障害のある人には正面から話すという、伝え方の基本的な技術を知っておいてほしい。

→　聴覚障害があることを知られたくない生徒もいる。聾学校の生徒であることを覚えてもらい、さりげない配慮がありがたい。ホテル日航ハウステンボスでは、「どのような制服をお召しですか？」とさりげなく制服を尋ねられた。そして、聾学校の生徒の制服が関係者全てに伝わり、正面から話

してもらえた。

・医療的ケアに関わる対応が必要になる。
→　医療的ケアの生徒がいることや緊急時の対応について、あらかじめホテルに伝えた。
→　呼吸器の設置、酸素の機械の設置、ベッドの移動などをお願いした。
→　管などを洗えるように、電源と水場がある部屋を予約する。部屋の中で子どもを見ながら洗えるような場所にあるとよい。

・入浴介助を必要とする。
→　ユニットバスではなく、お風呂とトイレは別々の部屋を予約した。
→　大浴場や家族風呂を、時間を区切って貸切にしてもらった。他にも団体が宿泊している場合、あらかじめ情報を得て調整を図った。
→　寝た状態で更衣できるかどうか、脱衣場の広さや物の位置を事前に確認した。
→　浴室の椅子が利用できない場合に備え、風呂マットなどの借用依頼や準備をした。
→　車いすで寝たきりの生徒、自分で移動できない生徒は、抱きかかえて連れて行った。湯船に入る時、バスタオルで包んで二人の教師が抱えて入った。上がった後、脱衣所の床に横になって着替える際、バスタオルを敷いてその上に寝かせた。その際、１泊につきバスタオルを２枚借りた。バスタオルはたくさんあるとありがたい。

・興味のあるものに触れてしまう。
→　窓の開閉ができないように、あらかじめロックしてもらう。
→　テレビ、机、椅子など、なるべく何もないように撤去してもらう。

３．食事

・「バスを降りてから、何分」というのは、大人の足よりも時間がかかる。移動で疲れてしまい、レストランに着いてから不安定になりちゃぶ台をひっくり返した子どもがいた。
→　移動距離を短くし、行程にゆとりをもつ。

・車いすの生徒たちのための十分なスペースが必要となる。
→　下見でレストランの食事場所の広さの確認をする。

・エレベーターが一人用だと、車いすが何台もあると行ったり来たりで時間がかかってしまう。
→　１階のレストランだと行きやすい。

・ざわざわした音や雰囲気が苦手である。
→　レストランを個室や自分たちだけで座れるテーブルにしてもらった。
→　混雑している時間帯を避け、比較的空いている時間に利用するようにしている。

・バイキングの際、取ったり食べたりが困難である。［視覚障害］
→　平らな皿ではなく、スープ皿のようなお椀タイプのものを借用した。
→　レストランの職員の方に、生徒の横で説明しながら介助していただいた。混雑していても、実体験を伴う活動をさせたい。

・弱視の生徒は、顔を近付けて見てしまうことがある。［視覚障害］
→　あらかじめマナーを指導しておく。

・円卓の取り分けは難しい。［視覚障害］
→　懐石料理など、一人分（自分のエリア）がはっきりしているとよい。時計の位置で説明する。

・食べこぼしてしまう児童生徒がいる。
→　エプロンが必要になる。使い捨てタイプを持参して、有効だった。

・通常の食事、アレルギー、硬いものがダメ、といった児童生徒一人一人に応じた食事をする必要がある。
→　飲食店の多い場所やテーマパークでの食事は、それぞれが食べられるもの、食べたいものを選べるように計画を立てた。

・アレルギーへの対応を必要とする。
→　メニュー表や写真、成分表を事前に送ってもらえると、保護者も安心できる。

→　アレルギー除去食の対応ができない場合、生徒に寂しい思いをさせないように、食べられるものを教員が現地で調達した。
・ミキサー食、刻み食など二次調理を必要とする。
→　インターネットで介護食を出していただけるレストランを見つけて、利用した。何も手を加えず食べるだけでよかった。
→　刻み方やミキサーのかけ方など、気を付けるポイントをあらかじめ伝えておく。
→　運搬が大変であるが、刻み食やミキサー食の道具を持っていく。
→　道具の洗浄をお願いできたり、洗うスペースをお借りできたりするとよい。
・注入食の児童生徒がそのレストランで食事をとらない場合、席料が必要な場合がある。
→　柔軟に対応していただけるとありがたい。

４．買い物
・どこに何があるか分からない。［視覚障害］
→　品物の案内（どこに何があるか、それが何か）をしていただけるとありがたい。現地の方とのやりとりを楽しんだり、言葉を交わしながら方言や土地のにおいを感じたりできるようにしたい。
・手話によるやりとりに時間がかかる。［聴覚障害］
→　筆談なども用いた対応をお店に依頼する。
・混雑する中で品物を選んだり、代金を支払ったりするのは時間もかかり、困難である。
→　ホテルのお土産屋さんなど、混雑しない場所や時間に利用した。TDR でしか買えないものだけ園内で買い、後は他の場所で買った。購入するために複数の店を確保した。
→　TDR のお土産をホテルで買えるように、パートナーのホテルに宿泊した。移動だけでなく、買い物も考慮した。
→　通路が広い、レジが多いなどのお店を行程に組み入れた。
→　TDR で帰りの混雑を避けるため、日中の空いている時間帯に買い物を済ませ、コインロッカーに入れておいた。
→　当日迷わなくてよいように、事前に買い物計画を立てた。事前に下調べをした。
→　計画しておいても買えないこともあるので、あまり細かく指定したり限定グッズを希望したりしない方がよい。
→　混雑した所を避けて通るのではなく、そうした所でも購入できるように事前に情報提供し、事前学習をする。
→　子ども自身で支払うことも大切だが、全て子ども自身で買うのではなく教師がまとめて買ってもよい。大勢で時間がかかってしまうのは、マナーとしても好ましくない。修学旅行では楽しむことが大事という考え方で、買い物学習は別の機会に行う。
→　力の調整が難しかったり、指先に力が入らなかったりする生徒にとっては、お金の受け渡しが困難である。お札や硬貨を出すことよりも、今後は電子マネーやカードでの支払いが増えてくる。ジップロックに「よろしくお願いします。お釣りとレシートはこの中に入れてください。」というメッセージを貼り、昼食用・お土産用などいくつか用意した。本人もやることが分かり、自分でお店の人に渡すことができた。ジップロックは摩擦があり、つかみやすい。生徒にとって分かりやすい手がかりになる。「買い物の時はジップロック」と、シンプルにすることで生徒が自分の力を最大限発揮してその生徒なりの買い物ができた。

５．見学・体験
・見ただけでは分からないので、体験できるようにする。［視覚障害］
→　人数が少ないので、子どもの興味に特化した五感で体験できる行程を組んだ。
→　学校に茶道室があるので、事前学習をして現地での茶道体験に臨んだ。事前にイメージをもつことができ、現地でも質問できた。
→　トロッコ列車への乗車を行程に組み入れた。普段乗る電車とは違った、ゆっくり風を感じながらの乗車ができた。

→　体験中、色合いや見た目などを言葉で案内していただけるとありがたい。教師も説明するが、その意味が分かるプロの方の説明があると、より理解が深まる。
・触地図や点字ガイドブックは、持参するにはかさばる。[視覚障害]
→　事前に入手し、事前学習で使用する。現地にあれば、それを借用する。二条城から点字パンフレットやＧスピークペンを借用でき、事前学習ができた。
・弱視の児童生徒にとって、遠くのものが見にくい。[視覚障害]
→　iPad などで拡大して見せる。ただ、写真撮影不可の場所では、撮影しているわけではないが iPad などの使用がはばかられる。そうした場所でも対応していただけるとありがたい。
・説明を聴き取ることができない。[聴覚障害]
→　手話通訳を依頼する。教師が手話通訳をする場合もあるが、生徒には説明してくださる方を見て聞いてほしいので、教師の立つ位置が難しい。
→　説明のガイドさんが付く時は、話し方をゆっくりにし、視覚情報を付けてもらう。パンフレットや簡単な説明文があるとよい。金閣寺では、説明のポイントを書いたカードを提示してもらえたので、ありがたかった。
→　他のお客さんと一緒ではなく、単独のグループにしてもらえるように依頼する。
→　ビデオによる説明に、字幕を付けてもらえるとよい。名古屋の JICA のビデオには、お願いしたら数年後に字幕が付いた。
・班別のタクシー研修で、運転手さんが熱心に話してくださっても分からなかった。また、音声で流暢に会話ができると、聞こえていると思われて通常のスピードで話しかけられることがある。
→　紙に書いて渡してもらったり、UD トークなどコミュニケーションアプリを活用したりできるとありがたい。
・携帯電話等を使うことが難しい。[聴覚障害]
→　グループ活動等において「ここに行けばよい」という「本部」の存在が重要である。テーマパークだけでなく市内研修においても「本部」になる施設や店舗を事前に確認しておく。
・活動の見通しをもてるようにする必要がある。
→　事前にパンフレットを送ってもらったり、インターネットの情報を検索したりして事前学習をする。
・興味が限られている子どもに対して、興味のないものにも興味を引き付けられるとよい。
→　音声だけでなく映像による紹介があるとよい。動物には興味がないが映像に興味のある生徒が、水槽は見なかったけれど撮影した映像に対して興味をもった。撮影禁止の場所ではこうした対応が難しいのが課題である。
・USJ のゲストサポートパス、ミールクーポンについて、旅行会社や年によって対応が違った。TDR では、ゲストアシスタントカードを事前予約しておくことで、利用はスムーズだった。
→　現地で困らないように、事前の確認が大切になる。
・気候や混雑状況への対応が難しい。
→　11月に TDR へ行き、とても寒かったことがある。次年度、10月にしたら、気候はよかったがハロウィンで大混雑した。その翌年は、比較的空いている 11月に、防寒対策をして臨んだ。
→　TDR でゆったり過ごせるように滞在時間を延長したら、夕方以降は学校帰りや会社帰りの人で混雑した。また、日没後、移動の際の足元が薄暗かった。
・動きの激しいもの、回転するものなど、乗れないアトラクションがある。
→　写真や動画で乗れそうかどうか、安全を第一に考えて事前に確かめる。乗れるアトラクションのある所を目的地とする。

６．その他

修学旅行当日の場面ではなく、計画段階や事前準備に関する回答があった。内容毎に分けて挙げる。

（１）旅行業者や交通機関に関すること

・刻み食やアレルギー対応、宿泊先はユニットバスでなく浴室がありバリアフリーであることなど、仕様書として入札の時点でお願いしておく。

・参加人数が少ない、経費に上限がある、体調不良等による直前のキャンセルがある、配慮事項など特別の依頼が多いなど様々な理由により、担当してくれる旅行業者がほとんどない。
・生徒数が少ないためか、依頼する旅行業者のほとんどが入札に応じない。入札がなければ、学校で全て準備することになる。
・生徒数が少ないためか添乗員経費が高く、添乗員を付けずに添乗員業務を引率者で行った。
・新幹線の予約には旅行業者を通さなければいけないが、その業者が見つからない。
・生徒の体調や精神的な状態が分からないので、直前になってみないと計画が立てられないことがある。生徒が無理なく参加できるように、少人数でもあるので旅行社を通さずに教師が生徒の実態に合わせて計画を立てている。
・車いす使用を伝え、駅での対応も事前にお願いしておいたが、同じ新幹線を大人数の他の特別支援学校も利用しており、少人数の当校への対応は忘れられてしまった。

（２）行程に関すること

・生徒の実態に合わせ、通常学級と重複障害学級とで行き先を変えた。しかし、保護者の希望は重複障害学級もみんなと一緒に行きたい。配慮しながらみんなと同じ経験をさせたいが、安全面も大切にしたい。保護者にご理解いただけるようにきちんと説明し、保護者の意向を聞きながら考えていくことが大切である。
・本隊から分かれて動けるように、別行程を組むことも考えたい。沖縄まで行くことが難しい生徒がいた場合、帰りに大阪に寄るなどして行程を工夫したい。同一行程で無理はさせられないが、生徒全員が思い出を共有できるようにしたい。
・生徒も職員も見通しがもてるようしておくことが何より大事。事前に対応を考えておいてもいろいろなことが起こるので、ゆったりした計画を立てることが必要。
・みんなが安心して全員が参加できるような行き先、行程を計画する。
・精神的にもデリケートな生徒たちである。気持ちよく活動できることを優先し、そうすることによって気持ちにゆとりが生まれ、楽しむことができる。事前学習で見通しをもてるよう、丁寧に指導した。
・児童の実態から、同一行程が難しかった。車いすの児童ではないので、一般のタクシー２台を利用した。別行程を組んで、必要に応じて早めにホテルに戻ることができた。

（３）事前の打合せに関すること

・細かな依頼事項が正確に伝わらないことがある。旅行業者に依頼するだけでなく、挨拶かたがたダブルチェックの意味でホテルやTDRなどに直接連絡するとよい。また、口頭でお願いするだけでなく文書でお願いすることで、一人でなく関係する方々に知ってもらえる。
・依頼していたことと、当日の実際とが違っていると困る。事前に旅行業者だけでなく、現地の関係者と打合せをしておく。
・医療的ケアの必要な生徒がいた際、事前に全行程の下見をして関係者と対応について打合せをした。当日は保護者も同行した。
・急な体調不良に対応できるよう、事前の健康調査や養護教諭の同行などきめ細かに準備しておく。
・一番近い病院の情報を、旅行業者が窓口となって教えてもらえるとありがたい。

Ⅳ．考察

調査した特別支援学校では、各校の児童生徒に合わせて様々な配慮や支援がきめ細かくなされている。しかし、修学旅行においては学校や教師では対応しきれない困難さが多いことが分かった。最終的には児童生徒一人一人に合った対応が必要になるが、障害種や場面毎の基本的な対応を旅行業者・関係者の方に理解してもらえるようになることが望まれる。「修学旅行の後で、旅行会社の担当者の方と情報共有している。担当者の方から、困ったことやトラブルなどを教えてほしいとの申し出があった。」という特別支援学校もあり、こうした情報の蓄積が特別支援学校の児童生徒にとって安心・安全で思い出に残る修学旅行につながるであろう。一方で、入札がない、添乗員を付けられないなどの旅行業者に関わることや、新幹線の車いす対応座席の少なさなど、解決の難しい問題があることも浮き彫りとなった。

2020年には東京パラリンピックが開催されることも契機となり、障害のある人へ提供されるサービスは広がりつつある。交通機関やテーマパークでは、サービスの内容がウェブサイトでも発信されている。

新幹線の車いす対応座席の予約や多目的室の利用については、JR 東海「お身体の不自由なお客様へ」や JR 西日本「おからだの不自由なお客様へ」に掲載されている。ただし、ウェブサイトの情報は随時更新される点に気を付けたい。例えば、TDR では「ゲストアシスタントカード」は「ディスアビリティアクセスサービスならびに合流利用サービス」と、サービス内容が変更されており、USJ では2019年５月15日から「ゲストサポート・パス」の発行基準が改訂されている。前年度にならって修学旅行を計画するのではなく、最新の情報を入手することを心がけたい。

障害のある人への対応への多くは身体障害を対象とした「バリアフリー」であるが、日本航空（JAL）と全日本空輸（ANA）は、知的障害・発達障害のある人向けのサービスも提供している。JAL の「すかいちゃれんじ」、ANA の「そらぱすブック」「そらぱすビデオ（動画）」は、いずれも空港での手続き・保安検査・機内での過ごし方など、搭乗から降機までの流れが写真付きで分かりやすく解説されている。航空機の利用が初めてだったり不安があったりする特別支援学校の生徒にとって、事前学習の教材としての活用が期待できる。

これらの情報はトップページから直接リンクが貼られていることも多く、障害のある人が情報を入手しやすい工夫が見られる。一方で、ウェブサイトに掲載される情報は一般的な内容にならざるを得ない。相談窓口の電話番号なども掲載されているので、一人一人に合わせた対応については、直接連絡を取って具体的に相談することが必要であろう。

Ⅴ．終わりに

今回の調査結果から、前報で作成した『特別支援学校の修学旅行を計画する際のポイント（試案）』の内容について、より詳しい状況を知ることができた。今後、本研究で挙げた全ての対応を記載することは難しいが、特別支援学校が旅行業者・関係者の方にお願いしたい支援や配慮について説明する際に活用できるような、基本的な対応やその情報源となるウェブサイトを紹介したリーフレットを作成し、活用を図りたい。

付記

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）「特別支援学校の修学旅行に必要な配慮や支援に関する研究」（16K02088）の一部である。

謝辞

本研究の趣旨をご理解いただき、調査にご協力くださった特別支援学校の先生方に深く感謝いたします。

注・文献

1）松本和久・安田和夫・櫻井康博・山内達仁（2018）：特別支援学校の修学旅行に必要な配慮や支援(1)－岐阜県の特別支援学校を対象とした調査から－，岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要，17，151-158.

2）松本和久・安田和夫・櫻井康博・山内達仁（2019）：特別支援学校の修学旅行に必要な配慮や支援(2)－修学旅行中に起こった予期せぬトラブルとその対応－，岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要，18，53-58.